

## SEND プログラムにおける協働―対等・対話・創造

館岡 洋子

## 要旨

SEND プログラムとして採択された「日本語教育学」総合学習プログラムを通じた重層的・循環的人材育成事業」では、参加学生、教師、スタッフが一丸となって取り組む中で、多様な学びが生まれた。それらに共通するキーワードが「協働」であった。

本稿では、2016年3月12日にタイのチュラーロンコーン大学で開催された実践報告セッション「SEND プログラムにおける協働―対等・対話・創造」でコンケン大学、チュラーロンコーン大学、チェンマイ大学、南洋理工大学の先生方4名の報告を受け、SEND プログラムにおいてどのような協働が起きたのか、それはどこから生まれたのかを検討する。

## キーワード

協働 重なり 異なり 価値創造

## 1. はじめに

グローバル化社会の進展の中で、国や文化の垣根は以前にもまして低くなり、異なった人々がどのように協力して問題を解決したり、新たなものを生み出したりできるかが問われるようになってきた。こうした文脈の中で、ASEAN 諸国の学生、教師、スタッフが一丸となって取り組んだ SEND プログラムにおいては、さまざまな場で多様な学びが生まれた。それらに共通するキーワードが「協働」ではないだろうか。

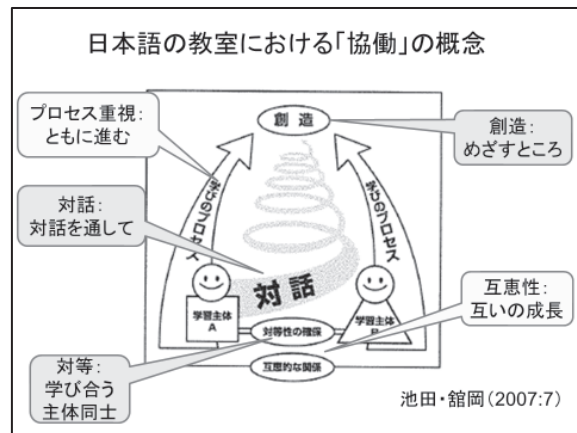
協働の考え方は、現在、あらゆる分野で重視されている。教育においても、自分とは異なる文化や価値観をもった他者と積極的に協力して、複雑で難しい課題を解決したり、安心安全で持続可能な環境を創造していったりするための「協働力」を育成することが求められているといえよう。このような協働する力の育成において、重要な視点が今回の SEND の実践報告セッションのテーマとなった「対等」「対話」「創造」である。プロジェクトに参加したアクターたちは、互いに異なった対等な存在であることを認め、対話をとおして互いを理解し、両者の間に信頼関係を築くことができたのではないだろうか。そして、協働によって、互いにもっている知識や経験を補完し合い、課題を最後までやり遂げることができたにちがいない。これらは大きな成果ではあるが、この実践報告を聞いて筆者が感じたのは、これらの足し算的な成果にとどまらないもの一足し算を越える何か新たな価値創造が生まれたのではないかということである。

## 2. 協働とは

「きょうどう」には、「共同」「協同」「協働」の漢字が当てられる。共同アンテナは「共同」だし、「生活協同組合」は「協同」である。ここでは新たなものを生み出す創造的な活動として、「協働」をもちいる。協働(collaboration)とは、「互いに協力して何かをつくりあげる創造的な活動を行うこと。ひとりではなしえなかった創発がおきる」とする(館岡(2005))。

池田・館岡(2007:7)では、協働を以下の5つのキーワードで整理している。

- ①対等：学び手同士はそれぞれ異なる知識・情報を有している対等な存在である。
- ②対話：学び手同士が協働するための手段であり、互いに相手を理解し信頼関係を築く。
- ③創造：協働の目標である価値創造を目指す。
- ④プロセス：学びの結果ではなく学びのプロセスを重視する。
- ⑤互恵性：互いの自己成長をめざし協働することで各自のゴールにたどりつく。



## 3. SEND における協働

今回のパネルセッションでは、4校の代表の先生方から、SEND プログラムで起きたさまざまな協働についての発表があった。

コンケン大学教育学部日本語教育課程では、初等中等学校で教育実習中の5年生と早稲田大学の派遣生がチームティーチングで実習を行った。両者は対等な立場で実習を組み立て、互いに自分たちにしかできないことを提供し合い、単独では行えないような新しい授業ができたという。

チュラーロンコーン大学では、タイ人学生が日本人学生に「教えてもらおう」という一方向の流れでなく、「日本語を学ぶタイ人学生」と「日本語教育を学ぶ日本人学生」が「互いに学び合う」という双方向の流れにしたいという担当教師の意識を反映し、授業では立場や国籍を超えた協働が起きたという。

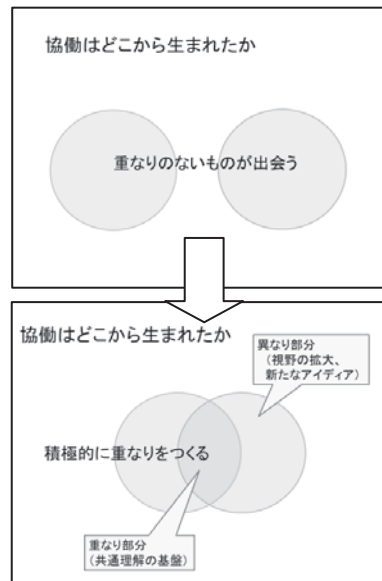
チェンマイ大学においては、チェンマイ大学日本研究センターの修士課程と早稲田大学日本語教育研究科・日本語教育研究センターとの協働をとおして、新たな実習生受け入れの形が生まれた。早稲田からの SEND 長期実習生とチェンマイ大学のタイ人教員との協働では、実習生ばかりでなく双方に学びがあり、結果として、教材をはじめ、さまざまなものが創造されたという。

南洋理工大学においては、教員間、スタッフ間の協働がよい連鎖反応を生み出し、プログラムを成功させた。そこには、学生・送る側・受け入れる側の三者の視点に立つこと、「報・連・相」を小まめにする、PDCA サイクルを適切に回すことの3点が挙げられた。

#### 4. 協働はどこから生まれたか

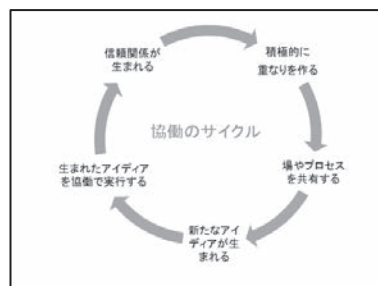
前節に述べたように、SEND プログラムの実践の中では、早稲田と派遣先の両校の学生同士の協働、早稲田からの実習生と受入れ大学の教師との協働、双方の大学の教師とスタッフたちの協働など、いろいろな場で協働が起きていたことがわかった。

このような協働はどこから生まれたのだろうか。そもそも両者の出会いの時点では、重なりはない。しかし、いっしょにプロジェクトを遂行する中で、重なりと異なりが可視化されていく。当該プロジェクトにかかわるアクターたちは、互いに異なっているからこそ、違和感をもったり、コンフリクトを感じたりしたにちがいない。一方、異なっているからこそ、新たなものを生み出しえたともいえよう。異質な他者が脅威とならずに対等に対話を繰り返し、新たなものを創造するには、両者が「異なり」をもちつつも、理解しあえる共通基盤のような「重なり」が必要だといえるのではないだろうか。したがって、積極的に重なりを作りつつ異なりを生かしていく態度や重なりと異なりの具体的なデザインが重要になってくる。SEND プログラムにおいては、重なりのない者が出会い、プロジェクト遂行の過程でさまざまな場で異なりと重なりが見えてくる中で、さらに、そこに積極的に重なりをつくっていくことにより、新たな価値創造が行われたように思われる。



#### 5. 協働のサイクル

おそらくこのような協働的なプロジェクトを成功させるためには、「積極的に重なりをつくっていく」という態度が何よりも重要なのではないだろうか。4校の報告からもそれを学ぶことができる。たとえば、コンケン大学やチュラーロンコーン大学の事例では、両者が対等であることが意識的にデザインされた。また、チェンマイ大学では、タイ人教師と早稲田実習生とが場を共有することで、



活動のプロセスを共有することになり、新たな教材が生まれた。南洋理工大学では、教員やスタッフが緊密に連絡を取り合うことで、重なりを作ってきた。このように両者が積極的に重なりを作ることで、異なったところにあるものに重なりが生まれ、場やプロセスを共有することができる。その結果、異なった者同士が意見を出すことができるようになり、そこから新たなアイデアが生まれる。生まれたアイデアを共有する、あるいはいっしょにアイデアを生み出すことにより、最終的にはアイデアを協働で実行する。そのプロセスは楽しく創造的だ。そこで、小さな成功体験を共有することになり、信頼関係が生まれる。その結果、重なり部分は以前よりも増えてきて、さらに場やプロセスを共有することになる。こうして、協働のサイクルが動き出す。異なりをうまく生かしながら、積極的に重なりを増やしていくことで協働のサイクルは活発に動き、新たなものを生み出す。これこそが冒頭に述べた足し算の法則ではない新たな価値創造を生み出すサイクルであろう。そして、さらにはこの輪の成員たちは、この輪の外に飛び出し、次の世界でも新たなサイクルを創造していくにちがいない。

SEND プログラムにおけるこのような経験から、私たちはこれからのグローバル社会を生きていくための多くの知恵を学ぶことができるのではないだろうか。

## 参考文献

- 池田玲子・舘岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門―創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房
- 舘岡洋子（2005）『ひとりで読むことからピア・リーディングへ―日本語学習者の読解過程と対話的協働学習―』東海大学出版会

（たておか ようこ 早稲田大学大学院日本語教育研究科）